NANOBRAND合同会社
代表社員　兼　CEO　高橋憲示

「洗う×福祉」による新時代の循環ビジネス

自分の作業が誰かの生活を支えているという実感は何よりの誇りとなる

徳島県阿南市の合同会社アワスピンが導入したウェットクリーニング機「てあらい機 はごろも」は、地域の暮らしに静かな変化をもたらしている。株式会社創明工芸が製造するこの機械は、品物を動かさず水流だけで洗う独自構造を持ち、家庭では洗えない、あるいは一般のクリーニング店でも敬遠されがちな品目を安全に洗浄できる点が特徴だ。導入後、剣道防具やぬいぐるみ、チャイルドシート、着物など、従来のクリーニングでは扱いづらかった品目の依頼が増え、地域から注目を集めている。これらは家族の時間や思い出が染み込んだ大切な品々でありながら「汚れが気になるのに洗えない」という矛盾を抱えてきた。破損の不安、型崩れの心配、中まで乾かない構造、カビのリスク。こうした不安を「はごろも」は確実に解消していく。繊維の奥に入り込んだ汗や皮脂をやさしく押し出す水流設計と、毎回同じ条件で洗える再現性は、「安心して任せられるかどうか」が問われる領域で確かな信頼を生み出した。

だれでも可能な操作性が実現した「多様性」

しかし、この技術がもたらした最も大きな変化は、生活者の利便性向上だけではない。一般のクリーニング店では敬遠されがちな品物を、福祉事業所が担えるようになった点にこそ、アワスピンの取り組みの社会的意義がある。剣道防具やチャイルドシート、着物は、洗浄の難易度や破損リスク、衛生管理の責任の重さから、多くのクリーニング店が取り扱いを避けてきた。しかし、「はごろも」の「品物を動かさない洗浄方式」は破損リスクを大幅に下げ、工程の標準化を可能にした。これにより、洗浄後の仕上げや乾燥後の検品、パッケージング、受け渡し補助といった工程が、福祉事業所の仕事として成立するようになった。

丁寧さと正確さを求められるこれらの作業は、障がいのある方々の特性と自然に重なる。福祉事業所にとって、この変化は単なる業務拡大ではない。従来の軽作業中心の仕事に比べ、生活者の「困りごと」を直接解決する実感が得られる点で、働く人々の自己効力感を高める効果がある。利用者が仕上げた品物が再び誰かの生活に戻っていくという循環の中で、「ありがとう」が直接届く仕事が生まれたことは、地域福祉にとって大きな意味を持つ。働く人々にとって、自分の作業が誰かの生活を支えているという実感は、何よりの誇りとなる。

福祉の自立支援で、社会課題を相殺する

アワスピンの取り組みは、地域の役割分担を静かに再編している。これまで「難しい」とされてきた領域を福祉事業所が担えるようになったことで、地域の中で互いの弱点を補い合う“課題相殺”の構造が生まれた。クリーニング店が抱えていたリスクや負担は軽減され、福祉事業所には新しい仕事が生まれる。生活者は安心して大切な品物を預けられ、地域全体の衛生環境が向上する。「はごろも」を中心に、技術と福祉と暮らしが結びつき、地域の中に新しい循環が形成されつつある。てあらい機「はごろも」は、単なる洗浄機ではない。生活の不安を解消し、誰かの役割を生み、地域に新しい価値をもたらす“社会装置”として機能している。技術が媒介となり、人と仕事が再び結びつく。その静かな変化は、福祉の現場に確かな誇りをもたらし、地域の未来を形づくり始めている。

古着物に新しい命を～小さな地域プロジェクトが大企業を動かした理由

全国から集まる古着物が、再び生活者の手に戻るまでの道のりを描く「engimonoプロジェクト」が、注目を集めている。着物文化の衰退と大量廃棄という課題に向き合い、古い着物を“素材”として再生し、新たな価値を生み出す取り組みだ。しかし、このプロジェクトが特筆されるのは、単なる伝統素材の再利用ではない。地域の福祉、環境、文化、そして大企業のESG経営までを巻き込み、持続可能な循環を生み出している点にある。

着物は、日本の文化を象徴する存在でありながら、現代の生活では扱いが難しい。汚れやシミ、保管状態の悪さ、虫食い、サイズの不一致。こうした理由から、まだ使えるはずの着物が大量に廃棄されている。家庭に眠る古い着物は、思い出が詰まっていにもかかわらず、再利用手段が限られているの現状だ。

◀アワスピン「てあらい機はごろも」導入時

engimonoプロジェクトは、この「もったいない」に正面から向き合った。全国から寄せられた着物は、まず障がい福祉事業所に運ばれる。ここで、てあらい機「はごろも」を使った洗浄が行われるが、繊細な着物でも破損の心配が少ない。着物を一枚ずつ丁寧に広げ、汚れや傷みを確認しながら洗浄機にセットする。洗い上がった着物は、乾燥後に再び広げられ、糸をほどき、反物のような状態に戻される。色柄や素材ごとに選別し、折り目を整え、パッケージングするまでの工程も、すべて福祉事業所の手仕事だ。この作業は、集中力と丁寧さが求められる。福祉事業所で働く人々の特性と自然に重なり、作業の一つひとつが「文化を未来へつなぐ仕事」として成立している。こうして生まれた再生生地は販売され、生活者の手に渡っていく。

このプロジェクトの広がりを象徴する出来事が、無印良品でのポップアップ出店である。シンプルで生活に寄り添う無印良品の空間に、色とりどりの再生生地が並ぶ光景は、伝統と現代が自然に溶け合うようだった。初日から多くの来店者が足を止め、手に取り、素材の魅力と背景にある物語に耳を傾けた。売上だけでなく、生活者の反応そのものが、プロジェクトの価値を証明していた。背景には、同社が掲げるESG経営との高い親和性がある。環境(Environment)では、廃棄されるはずだった着物を再資源化し、循環型社会の実現に寄与する。 社会(Social)では、福祉事業所の就労機会創出と、働く人々の誇りにつながる仕組みを提供する。 ガバナンス(Governance)では、地域と企業が協働し、透明性の高いサプライチェーンを構築する。

大企業が求めるESGの要素を、地域の小さなプロジェクトがすべて満たしていた

むしろ、企業が自ら実現しようとしても難しい「地域との共創」を、engimonoは自然な形で体現していたのである。小さな取り組みが大企業を動かした理由は、そこに“本物の循環”があったからだ。廃棄される着物が再び社会に戻る「資源の循環」。福祉事業所に新しい役割が生まれ、働く人々の誇りにつながる「役割の循環」。 そして、文化を未来へつなぐ「価値の循環」。engimonoプロジェクトは、伝統文化の再生と地域福祉の活性化を同時に実現する、静かだが力強い取り組みである。 その循環はこれからも広がり、地域と企業の未来に新しい可能性をもたらしていくだろう。

社会の未来は事業が創る

「はごろも」を中心に展開された二つの事業には、共通する社会性が見える。捨てられるものを救い、価値を取り戻すこと。衛生と安全を基盤に信頼を提供すること。福祉の現場に新しい役割を生み、働く誇りを育むこと。そして、

（7）　2026年（令和8年）2月10日（火曜日）　三　株　新　聞

全国から集めた
就労継続支援事業所で布地にほぐして梱包
着物を専用機で洗浄
ポップアップショップ1日で売り上げ10万円

無印良品燕店でリサイクル着物地販売
「engimono」プロジェクト

リサイクル着物地販売のポップアップショップ

お客に入りのパンでもきっと出会える
サンフォーレット
三条市北入蔵2-18-25
TEL.38-4100

無印良品燕店（燕市）で販売されたリサイクル着物地

洗浄から再生、販売へと続く循環が持続可能な収益モデルとして成立していること。剣道防具も、ぬいぐるみも、着物も、地域の暮らしを支える文化の一部であり、その価値を守る仕組みが静かに広がっている。てあらい機「はごろも」は、単なる洗浄機ではない。生活の不安を解消し、誰かの役割を生み、文化を未来へつなぎ、地域に新しい循環をつくる“社会装置”として機能している。技術が媒介となり、人と仕事と文化が再び結びつく。その静かな変化は、福祉の現場に確かな誇りをもたらし、地域の未来を形づくり始めている。事業とは販売戦略やセールスだけでは成り立たない。事業とは社会の未来を創るものである。目先の小銭を追いかけていると、大切な商機を逃すものです。

おわりに

ナノブランド合同会社では、様々な事業者が地域課題解決を実現するために、ESG経営よる事業構築と推進の実施についてサポートしています。これまで多くの経営者が効果を実感し、経営改善を実現してきました。

事業実現のためのノウハウを学びやすく二十四回のカリキュラムにした「日本互助育プログラム」は中小企業がESG経営を実現するための革新的な内容となっています。ご希望の方は公式サイトをご覧ください。

日本互助育成プログラム

アワスピン HP